単元の言語活動３
◆文語定型詩と口語自由詩を読み比べる

活動のねらい

収録詩編のうち文語定型詩にあたるのは室生犀星の「小景異情（その二）」だが、この作品を通して文語定型詩特有のリズムに触れ、口語自由詩との違いを理解することは、日本の詩歌の歴史的発展の基礎を学ぶことに繋がるはずである。また、「小景異情（その二）」以外の三篇も、同じ口語自由詩ではあっても、それぞれまったく異なる手触りを持っている。文語や定型の代わりに、どのような技法や工夫が口語自由詩を「詩」たらしめているのかを具体的に考えることを目指す。

タイトル・序文の解説

現代にいたるまで口語自由詩を中心に展開してきた日本の近・現代詩には、詩と散文を区別する明確な定義が存在しない。定型という分かりやすいルールをなくし、どのように書けば優れた詩と言えるのかという指針も存在しなくなったことで、近・現代詩がマイナーな文芸ジャンルとなってきたことは、読者の母数が極めて少ないと言われる現代詩にとって、現在進行形の問題でもある。漠然と詩に興味はあっても、詩の定義が曖昧であるゆえにジャンル全体に対する理解が進まない生徒も少なくないだろう。本活動では、日本の近・現代詩が文語定型を脱する形で口語自由詩を発展させてきたこと、口語自由詩のなかにも多彩な展開があることを、具体的な鑑賞を通じて学んでほしい。

「課題」の解説

課題　文語定型詩と口語自由詩を読み比べ、それぞれの特徴や詩的効果について、話し合ってみよう。

現在、文語定型はほとんど歴史的な文学作品の中にしか見られない形式となっている。現代の目から見ると、収録詩編のうち室生犀星の詩はいかにも古色蒼然としているのだが、ここで文語定型という古典的な形式のなかに込められているのは、地方から上京してきた人間の故郷への愛憎という極めて近代的な主題である。つまり、歴史的な位置づけとしては、古典詩歌と新たな近代詩との中間に位置する詩篇であり、それぞれの作品群と比較検討することで多くのことが見えてくるはずである。無論、望郷という主題は古くから存在するが、古典詩歌における故郷への思いと、犀星の歌う都と故郷に引き裂かれた心情とがどのように違うかを考えたい。また一方で、この詩が口語自由詩で書かれていたら印象がどのように違うか、という思考実験を行うことによって、文語定型詩と口語自由詩がそれぞれもつ固有の効果や魅力を多角的に検討したい。

活動の解説

1　文語定型詩である室生犀星「小景異情」（二八六～二八七ページ）を読み、和歌や短歌との違い、また口語自由詩との違いについて、話し合ってみよう。

①この詩は、故郷への思いをうたっている。この教科書掲載の古典詩歌の中から、故郷への思いを詠んだ作品を探し、どのように詠まれているか、確認する。

②この詩を口語的に書き直してみて、朗読したときのリズムや内容上の印象、また読後感がどのように変わるか、話し合う。

1-①の活動は、それまで授業内でどういった作品を扱ってきたかによって進行のしやすさに違いが出ると思われる。必ずしも生徒が教科書内から自力で探し出す必要はなく、望郷と関わる主題をよりストレートに表出している作品を念頭に置きつつ、「小景異情」における愛憎の梹れや二律背反的な心情について理解を深めることを目的とする課題である。例えば漢文編の李白「静夜思」（一五一ページ）や杜甫「春望」（一五二ページ）には故郷への思いがつづられており、漢詩における伝統的な主題としての「望郷」を学びつつ読むことも有益だろう。また、詩歌編・短歌の石川啄木の歌（二六九ページ）にも「ふるさと」を恋う心情が読み込まれており、同単元の若山牧水の歌（二六九ページ）における、寂しい気持ちは解消されないがそれでも故郷には帰らず旅を続けるという漂泊の心情と、犀星の詩を比較してみるのもよいだろう。

1-②の活動は、伝統ある文語がもともと持っている格調の高さや安定感をあえて崩してみるという実験であるため、逐語的な正確さは必要なく、自由に口語的な現代文にアレンジしてみたい。その上で、文語定型詩の特質を体感的に摑むことを目指す。

2　口語自由詩である宮沢賢治「永訣の朝」（二八九～二九二ページ）を読み、口語表現や表記上の工夫がどのような詩的効果を生んでいるか、話し合ってみよう。

①この詩に用いられている平仮名や片仮名、ローマ字などの表記をほかの表記に書き換えた場合、言葉の印象がどう変わるか、確認する。

②この詩の特徴の一つに方言の使用があるが、詩歌や芸能において方言が用いられた例を探し、その表現効果について考える。

2-①の活動に関して、まず平仮名であることの効果が際立っているのは、丸括弧内のとし子の言葉だろう。「あめゆじゆとてちてけんじや」に関しては、賢治とトシの兄妹の絆を暗示する幼児語でもあるという見解がある（「語句の研究」参照）ように、これを例えば「雨雪（あめゆじゆ）取てちてけんじや」などとすると、方言の語感は残っても、幼いとし子のイメージは薄らいでしまうだろう。同様に、「Ora Orade Shitori egomo」なども、別の表記に直した場合は別の印象になるはずであり、こうした表記の作用について体感することを目指す。

2-②　必ずしも「永訣の朝」にように、標準語の中に導入されて異化作用をもたらす使用例を探すのではなく、口語としての

方言の豊かさと詩歌の関係について考えるための自由度の高い課題として設定している。文学史上の著名な例を挙げるなら北原白秋『思ひ出』（東雲堂書店　明治四十四）や大正～昭和期の創作民謡などがあるが、生徒各人が馴染んでいる方言の文学的可能性について考える機会としてほしい。

評価規準

(1) 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。〔知・技〕(1)ア
(2) 我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解している。〔知・技〕(1)オ
(3) 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解している。〔知・技〕(2)ア
(4) 時間の経過や地域の文化的特徴などによる言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。〔知・技〕(2)エ
(5) 「読むこと」ことにおいて、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。〔思・判・表〕Ｂ(1)イ
(6) 「読むこと」ことにおいて、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもっている。〔思・判・表〕Ｂ(1)オ
(7) 進んで現代の詩が、古典詩歌の文化的蓄積の上に成立していることを理解し、今までの学習を生かして、文語詩と口語自由詩を読み比べ、それぞれの特徴や詩的効果について考えようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕

（田口麻奈）